18 世紀におけるロシアの探検旅行と空間認識

梅木　達徳

18 世紀のヨーロッパは「啓蒙の世紀」と呼ばれている。啓蒙思想は 17 世紀後半にイギリスから始まった思想であり、その後フランス、ドイツで発展し、ヨーロッパ全体に広まった。啓蒙思想にはヨーロッパ各国の政治的・社会的・経済的状況が反映されていたが、啓蒙思想は国家の枠を飛び越えて知識人層やエリート、一般の人々にまで広まったため、ヨーロッパ諸国の啓蒙思想をそれぞれ切り離して考えることは困難である。17 世紀において、ヨーロッパでは近代的合理主義の思想や学問が確立され、自然科学の研究が発展を遂げた。18 世紀においてヨーロッパは新たに獲得した自然科学的知識を携えて世界各地へと進出していき、非ヨーロッパ世界に関する様々な記録がなされていく。そうした成果は非ヨーロッパ世界の人々、空間に対する認識の変化をもたらしたのである。

また、18 世紀はロシアの近代化の出発点とされ、ヨーロッパ的な近代国家となるべく様々な改革が行われた時代である。同時にロシアは、領土を大きく拡大させヨーロッパとアジアにまたがる帝国へと発展していく。さらに、ロシアはヨーロッパと同様に非ヨーロッパ世界への探検旅行を行い、自身の領土に関する様々な情報を蓄積していったのである。

本論文では、18 世紀において 1 つの共同体としての意識を形成しつつあったヨーロッパが非ヨーロッパ世界の人々をどのように認識したのか、そしてその過程としての探検旅行の意義を考察するとともに、ロシアにおける探検旅行の意義とヨーロッパとアジアにまたがるロシアのアイデンティティの曖昧さを明らかにすることを目的として考察を進めた。

本論文は、ロシアのアイデンティティの曖昧さを考察するうえで、エドワード・サイードのオリエンタリズム論に注目した。18 世紀の人類史や世界史は、進歩を知識、情報の蓄積と置き換え、オリエンタリズムの出発点とされている。18 世紀末までに世界各地に関する情報がヨーロッパで蓄積され、西洋が東洋を支配するのは当然であるというサイードが批判する思考様式が確立したのである。ヨーロッパのアジアに対する姿勢に関する近年の研究はサイードのオリエンタリズム論を基礎としていることが多い。西洋は東洋を他者、ミステリアスで敵意を持つ危険な文化的競争相手と考えることでアジアの支配を成し遂げたということである。サイードが指摘する西洋とはイギリスやフランス、アメリカのことを指し、ロシアは除外されている。しかし、ロシアの行政官や知識人がアジアの諸民族に関して述べた文章には「野蛮」「狂信的」「発達水準の低さ」といった言葉が多く見受けられ、ロシアはオリエンタリズムとは無縁であったと言うことはできない。それにもかかわらず、ロシアのオリエンタリズムに関しての研究は決して盛んではないというのが現状である。

世界を東と西に分ける発想に準拠し、ロシアが一体どちらに属するのか判別することは難しい。ロシアが西になりえる理由はキリスト教を受容したことであるが、ロシア中央部は西アジアと同じくらい東に位置している。ロシアがヨーロッパとの関係を深めていくなかで、「ロシアはヨーロッパか？アジアか？」「ロシアは東か？西か？」という問いはロシアの知識人を悩ませ続け、これらの問いに対する明確な答えは現代においてもはっきりと示されていない。

第 1 章「啓蒙主義と探検旅行」では、啓蒙思想の特徴や人々に広まった経緯、その時代に行われた探検旅行を概観し、探検旅行の意義やそれにより形成された非ヨーロッパ世界のイメージについて論じた。啓蒙思想は人々の批判の精神を育み、絶対的な権力を誇っていた君主やキリスト教的世界観にまでも批判の目が向けられた。アカデミーやサロン、読書協会、出版物は啓蒙思想を知識人だけでなくエリート層や一般の人々の間に広め、ヨーロッパ全体の共通認識を育んだ点において大きな役割を果たした。また、この時代の探検旅行により非ヨーロッパ世界に関する知識が蓄積され、人類史、世界史の叙述がなされた。これはヨーロッパ人を進歩の頂点として記述され、後の時代の植民地支配の正当化につながるものであった。

続く第 2 章「ロシアによる探検旅行」では、18 世紀のロシアを概観し、ロシアが行った探検旅行とその意義について論じた。18 世紀ロシアにおいて西ヨーロッパをモデルとした改革が行われ、そのシンボルはサンクト・ペテルブルグの建設であった。領土の拡大とともに国力を増大させたロシアは帝国を名乗り、ヨーロッパとの関係を密にしたのである。それをふまえると 18 世紀全体を通してヨーロッパの啓蒙思想の影響を受けていたと考えるほうが妥当であろう。ロシアの探検旅行も知的・博物学的好奇心が源泉なるものであり、領土に関する知識の増大をもたらしただけではなかった。地図の作成や探検旅行の学術的テキストはロシアの領土意識を形成させ、ロシアのヨーロッパ的性格を表すものであった。ロシアの探検旅行は、ロシアがいかにヨーロッパ的性格を有した国家であるのかを示し、ロシア人自身が自らのことをいかに啓蒙思想の影響を受けたヨーロッパ人であるのかを認識する上で大きな役割を果たしたのである。

最後に第 3 章「ロシアの空間認識」では、帝国として発展した 18 世紀ロシアのアジアへのまなざしについて論じた。ロシアはその領土内に多くの民族を内包する陸上帝国であった。西欧化を果たしたロシアにとってシベリアはアジアと見なされ、ロシアにとってアジアとは文明化という使命を果たすべき対象であった。まさにヨーロッパと非ヨーロッパ世界の文明化をもたらすという使命を共有していたのである。その一方で、アジアを隣接するロシアこそが真にアジアを理解する力を有していると認識していた。多くのアジア諸民族をその領土内に抱え、陸続きに膨張したロシアはヨーロッパほどアジアとの差異を感じていなかった。さらにヨーロッパ人のロシア人蔑視への反応としてロシアのアジア的性格を認め、ヨーロッパ文明と切り離されていることを称賛する動きも見られた。それによりロシアはヨーロッパとの関係に疑念を抱いた時にアジアを自らのアイデンティティとして主張できたのである。

ここまでの考察をふまえると、18 世紀に西欧化を果たしたロシアがアジアを一方的に蔑視してきたと言うことはできないであろう。確かに 18 世紀においてロシアは西ヨーロッパをモデルとした改革を行い、探検旅行によってロシア人自身もそのヨーロッパ的性格を自覚した。しかし、ロシアの帝国としての性質や地理的位置から、ロシア内部に眠るアジア的性格を拭い去ることは不可能であった。

このヨーロッパとアジアをまたぐロシアのアイデンティティの曖昧さは、ユーラシア主義の誕生に大きく関わるものであったと考えられる。世界を東と西に分ける発想に対して、ロシアはヨーロッパでもアジアでもない、2 つの世界を結びつける独自の世界「ユーラシア」であるという主張がユーラシア主義と呼ばれる思想である。ユーラシア主義はヨーロッパ文明批判が起点となったものであり、ユーラシア主義を唱えた知識人は、ヨーロッパ文明こそが最も優れ進歩的であるという発想を否定し、世界のあらゆる文明に等しい価値があると主張している。ロシアに眠るアジア的な文化と価値観を肯定的に捉えヨーロッパとアジア、そしてスラヴが等しく結びつく世界としてロシアを描き出したのである。18 世紀にヨーロッパ文明を受け入れヨーロッパの目を通してアジアを認識したロシアがこのようなユーラシア主義を唱えることを可能にした背景には、ヨーロッパでもアジアでもないロシアのアイデンティティの曖昧さがあったと考えられる。

参考文献一覧

(1) 日本語文献

・宇山智彦「地域認識の方法――オリエンタリズム論を超えて」、同編『講座　スラヴ・ユーラシア学　第 2 巻　地域認識論――多民族空間の構造と表象』講談社、2008 年、11-36 頁.

・宇山智彦「〈東〉と〈西〉」、塩川伸明ほか編『ユーラシア世界 1　〈東〉と〈西〉』東京大学出版会、2012 年、1-16 頁.

・ウルリヒ・イム・ホーフ（成瀬治訳）『啓蒙のヨーロッパ』平凡社、1998 年.

・エドワード・W・サイード（今沢紀子訳）『オリエンタリズム　上』平凡社、1993 年.

・岡崎勝世『世界史とヨーロッパ――ヘロドトスからウォーラーステインまで』講談社、2003 年.

・織田武雄『地図の歴史』講談社、1973 年.

・小田中直樹・帆刈浩之編『世界史／いま、ここから』山川出版社、2017 年.

・カルパナ・サーヘニー（松井秀和訳）『ロシアのオリエンタリズム――民族迫害の思想と歴史』柏書房、2000 年.

・川端香男里・佐藤経明・中村喜和・和田春樹・塩川伸明・栖原学・沼野充義監修『新版　ロシアを知る事典』平凡社、2004 年.

・ジョン・ルドン（松里公孝訳）「18 世紀のロシア（1700-1825）」、和田春樹・家田修・松里公孝編集責任『講座スラブの世界　第 3 巻　スラヴの歴史』弘文堂、1995 年、63-95 頁.

・高田和夫『ロシア帝国論――19 世紀ロシアの国家・民族・歴史』平凡社、2012 年.
・多木浩二『ヨーロッパ人の描いた世界』岩波書店、1991 年。
・デイヴィド・シンメルペンニンク＝ファン＝デル＝オイェ（浜由樹子訳）『ロシアのオリエンタリズム――ロシアのアジア・イメージ、ピョートル大帝から亡命者まで』成文社、2013 年.
・土肥恒之『ピョートル大帝とその時代――サンクト・ペテルブルグ誕生』中央公論社、1992 年.
・土肥恒之『世界史リブレット人 57　ピョートル大帝――西欧に憑かれたツァーリ』山川出版社、2013 年。
・ドミニク・リーベン（松井秀和訳）『帝国の興亡（下）――ロシア帝国とそのライバル』日本経済新聞社、2002 年.
・豊川浩一「啓蒙の世紀におけるロシアの「発見」」、『中近世ロシア研究論文集』中近世ロシア研究会、2014 年、102-117 頁.
・西山克典『ロシア革命と東方辺境地域――「帝国」秩序からの自立を求めて』北海道大学図書刊行会、2002 年.
・浜由樹子「思想としての戦間期ユーラシア主義」、塩川ほか編『ユーラシア世界 1　〈東〉と〈西〉』東京大学出版会、2012 年、51-71 頁.
・林俊雄「ロシアの探検家たち」、『東洋学報』第 80 巻第 2 号、1998 年、291-293 頁.
・坂内徳明「アレクサンドル・ラヂーシチェフ『ペテルブルグからモスクワへの旅』の時代」、『一橋大学研究年報・人文科学研究』第 38 号、2001 年、203-279 頁.
・廣岡正久「ユーラシア主義とロシア国家像の転換――スラヴ国家からユーラシア国家へ」、木村雅昭・廣岡正久編著『家と民族を問いなおす』、ミネルヴァ書房、1999 年、61-81 頁.
・弓削尚子『世界史リブレット 88　啓蒙の世紀と文明観』、山川出版社、2004 年.
・弓削尚子「啓蒙主義の世界（史）観」、秋田茂ほか編『世界史の世界史』、ミネルヴァ書房、2016 年、247-271 頁。
・和田春樹編『新版　世界各国史 22　ロシア史』山川出版社、2002 年。

(2) 外国語文献

・Mark Bassin,'Inventing Siberia: Visions of Russian East in the Early Nineteenth Century', *American Historical Review*, 96 (1991), pp. 763-794.
・Richard Wortman,'Text of Exploration and Russia's European Identity', in C. H. Whittaker (ed.), *Russia Engages the World,1453-1825* (New York: Harvard University Press,2003), pp. 90-117.
・Willard Sunderland,'Imperial Space: Territorial Thought and Practice in the Eighteenth Century', in Jane Burbank, Mark von Hagen, and Anatolyi Remnev (eds.), *Russian Empire: Space, People, Power, 1700-1930* (Bloomington: Indiana University Press,2007), pp. 33-66.